

# SHOW HEY シネマルーム



**Data**

監督・脚本・編集：北野武  
出演：北村総一朗 / 三浦友和 / 國村隼 / 杉本哲太 / ビートたけし / 椎名桔平 / 加瀬亮 / 石橋蓮司 / 中野英雄 / 塚本高史 / 小日向文世

## 👁️👁️ みどころ

「世界のキタノ」が、監督としても俳優としても自分に最もよく似合う(?) ヤクザ映画に回帰。彼の脚本が暴力団の組織内抗争になったのは、政治的にも経済的にも、そして若者の生き方的にも「内向き志向」となっているニッポンの現状の反映?

暴力シーン、殺害シーンの残忍さへのこだわりはキタノ流だが、血なまぐさい抗争に明け暮れる男たちの頭の悪さが目につくのが欠点。武闘だけで生き残れないのは世の常で、出世のためにはそれなりの戦略と戦術が必要だ。そんな視点で本作を観れば、誰が死に誰が生き残るかは、おのずと明らか?

\* \* \* \* \*

## アウトレイジとは? 徹底したワルから学ぶことは?

北野武監督作品は本作で15作目だが、近時12作目の『TAKESHIS'』(05年) (『シネマルーム9』398頁参照) 13作目の『監督・ばんざい!』(07年) (『シネマルーム15』416頁参照) とワケのわからない意味不明な映画にハマっていた(?) (ちなみに、私の採点は両者とも星2つ) 北野武監督が、彼に最もよく似合うヤクザ映画に原点回帰。合計11人の男たちが登場し、血で血を洗う抗争を見せてくれるが、本作最大の特徴は登場人物すべてが悪(ワル)だということ。しかも、そのワルさが生半可ではなく全員ワルに徹しているところや随所に登場する暴力シーン・殺害シーンの痛さと残忍さが、いかにも世界のキタノの脚本・演出だ。その方面によほど知恵を働かせ、工夫をこらしたことは本作を観ればよくわかる。

そこでつけられた本作のタイトルが『アウトレイジ』。これを聞けば一瞬ハリウッド映

画?とってしまうが、「OUTRAGE」とは「極悪非道」という意味。つまり、本作のタイトルはそれを単に英語読み、カタカナ文字にしかただけだ。鳩山由紀夫総理の例を挙げるまでもなく、近時の政治家はいい人ばかり。権謀術策を尽くす悪(ワル)の政治家は、小沢一郎を例外として(?)ほとんどいない感がある。しかし、政治の世界もヤクザの世界と同じで権力闘争が不可欠だから、悪(ワル)になれとは言わないが、本作にみるような権謀術策は不可欠なはず。

そう考えると、小粒になってしまった近時の政治家に本作は必見?さらに、今や「億総いい子状態」になってしまった日本人は、反面教師として本作を観れば、徹底した悪(ワル)から学ぶことも多くあり、大きな意味があるのでは?

## ヤクザ映画のテーマも内向きに?

近時韓国からアメリカへの留学が大きく伸びているのに対し、日本からのそれは約4割も減少していること、これは日本人が「草食化」して内向きになったのが原因ではないかと報じられた。オーストラリアや韓国への留学は減っておらず逆に増えているらしいが、若いサラリーマンが海外赴任を嫌がる風潮なども合わせて考えると、日本人の内向き思考はホンモノ?それと同じように(?)北野監督が書いた本作の脚本も、関東一円を取り仕切る巨大暴力団山王会内部における、池元組長(國村隼)率いる池元組と山王会の傘下に入りたがっている村瀬組長(石橋蓮司)率いる村瀬組とのちょっとしたイザコザをきっかけとしてくり広げられる、内部抗争劇だ。

東映任侠路線一色だった1960年代のヤクザ映画は1973年の『仁義なき戦い』以降一変し、東映実録路線が始まった。『アウトレイジ』が組織内の抗争であるのに対し、『仁義なき戦い』はあくまで自分の組がのし上がることを目指す、いわば成長型・拡大型抗争。そう考えると、『アウトレイジ』の内向き志向も明らか?池元組長から「村瀬組を締めろ」との指示を受けて動き始めたのが、武闘派の大友組長(北野武)率いる大友組だが、さてその展開は?

本作前半のストーリー展開を理解するには、ヤクザ社会特有の「落とし前」のつけ方を理解する必要がある。ぼったくりバーの呼び込み役だった村瀬組の組員・飯塚(塚本高史)が詰めた小指を持って、村瀬組若頭の木村(中野英雄)が大友組に落とし前をつけに行ったのに、大友組長は無理難題をふっかけて木村の顔面をメッタ切りにしたから大変。こんな仕打ちを受けた木村が大友への復讐を誓ったのは当然で、ここから報復が報復を呼び、事態は悪化の一途を。もし大友が飯塚の小指だけでカタをつけていけばコトは穏便に?そりゃそうだろうが、今更そんな「タラ・レバ」を言っても仕方がない。

このように、本作にみる池元組と村瀬組とのちょっとしたトラブルに、大友組を巻き込んださらなる抗争は、所詮山王会内部の抗争にすぎないから、そのメリットを享受できるのは内部の誰かだけ。これではまるで、何の経済成長戦略も打ち出せないまま、国内だけ

でパイの分配に四苦八苦している今の日本経済と同じ？

## 上下関係絶対の軍隊式規律の是非は？

日本で近代のかつ上下関係絶対の軍隊組織をつくり上げたのは織田信長だが、さてヤクザの組織は？本作をみていると、関内（北村総一郎）率いる山王会本家が配下のすべての組を直接支配しているのではなく、杯を交わした直系の組と大友組のように池元組の支配下にある弱小組を間接的に支配するものがあることがよくわかる。

トップには必ず側近つまりナンバー２がいるもので、ヤクザ組織ではそれは若頭と呼ばれている。山王会本家の若頭が加藤（三浦友和）、池元組の若頭が小沢（杉本哲太）、そして大友組の若頭が水野（椎名桔平）だが、同じ若頭でも山王会本家の若頭と大友組の若頭ではその力はえらく違う。そして、山王会本家の関内会長の前では若頭の加藤は絶対服従だし、池元組長も村瀬組長もペコペコするばかり。ましてや、大友組長などは直接関内会長との面会などできないのが組織の慣例だが、なぜか本作ではそんな異例の面会が実現するからそれに注目！

他方、人の上に立つには人心掌握術が必要で、その天才が豊田秀吉だったらしい。ちなみに、八方美人型の鳩山由紀夫首相はその八方美人ぶりがすべて暴露されるからヤバいわけで、あちらでもこちらでも同じように「僕は君を愛してるよ」とささやいていても、それがバレなければあちらの女もこちらの女も安泰だ。そればかりか関内会長のように、池元組若頭の小沢には「そろそろ組長に引退してもらって跡目を継げ」とささやき、大友組長には「池元組のシマはお前のものだ」とささやけば、いくら悪（ワル）でも根が単純な男たちは、それを信じてしまう。そんな人心掌握術はリーダーたるものの大切な素養なのだ。関内会長は組織維持のためのさまざまな人間管理の秘訣を若頭・加藤に教えながら、池元組と村瀬組の抗争をきっかけに着々と手をうってきたが、それがこれだけハまるのは、第１に男たちが単純なこと、第２にヤクザ社会における上下関係絶対の軍隊式規律のおかげだということを痛感！

## ヤクザなんてカッコ悪い！ヤクザなんて社会のクズ！

今時ヤクザがカッコいいと思っている若者などいないはずだが、パリッとしたスーツに身を固め、黒塗り的高级車に乗り込んでいる幹部の姿をみると、ひょっとしてそんな錯覚をする不屈き者がいるかも？しかし、本作をみればそれは見かけだけで、内実は何てカッコ悪い！ということがわかるはず。したがって、もしそれが北野武監督が本作で訴えようとしたことだとすれば、それは大当たり！

映画冒頭から「兄弟、兄弟」と馴れ合う池元組長と村瀬組長の人格的な品の無さは明らかだし、池元組長の命令どおりハチャメチャに人を傷つける大友組長も、言ってみれば単に粗暴なだけの人格破綻者？他方、中年イケメン代表（？）の三浦友和演ずる山王会本家

の若頭・加藤は次世代のホープと期待されているようだが、関内会長の前では全くカタなし。また、もう1人の中年イケメン代表(?) 椎名桔平演ずる若頭・水野も、立ち居振る舞いはそれなりにカッコをつけているが、やっていることの実態はひどいもの。とりわけ、水野と大友組の金庫番・石原(加瀬亮)が村瀬組のシマで風俗営業の斡旋や麻薬売買をやり始め、さらにはグバナン大使館を巻き込んで闇カジノ経営に乗り出す姿をみていると、なんて汚い手口を!とビックリするはず。

そう、ヤクザなんてカッコ悪い! ヤクザなんて社会のクズ!なのだ。

## 警察は抗議しなくていいの?

俳優北野武は悪役しか似合わない(?)が、オールラウンドプレイヤーとしてどんな役でもこなす俳優が小日向文世。この小日向文世が、本作では「こんな刑事ホントにいるの?」と誰もがビックリするような悪徳刑事片岡役を演じている。公務員改革の必要性は当然だが、不祥事をくり返す警察改革の必要性も当然。本作をみれば、それがよくわかる。

片岡は大学時代のボクシング部の先輩後輩として、大友と適宜情報を提供し合いながらうまく付き合っていたが、池元組と村瀬組の抗争が激化していく中、片岡の役割も次第に大きくなっていくことに。ちなみに、本作では片岡が山王会本家の若頭・加藤から「金一封」を受け取るシーンが何度も登場するが、その中には一体いくら入っているの? 刑事の給料はしれている(?)から、一度こんな味をしめれば、その誘惑に負けるのは当然かもしれないが、暴力団と警察との馴れ合い・癒着がこれほどひどいとは?

これが実態に即したもののか、映画のための誇張なのかの判断は難しいところだが、いくら「世界のキタノ」の脚本・演出とはいえ、こんな刑事が赤裸々に描かれたことに対して警察は抗議しなくていいの?

## いい年をして、みんな頭が悪い?

ぼったくりバーの呼び込みをしていた若い組員・飯塚が、いくらイケメンでも頭が悪いのは仕方ないが、本作を観ながらつくづく思うのは、池元、村瀬、大友の各組長らがいい年をしてみんな頭が悪いこと。ヤクザも競争社会だから誰だって出世したいのは当然だが、関内からちょっと甘い言葉をかけられると、なぜそれを安易に信用するの? とりわけ、池元組の配下にある大友組は弱小だから、大友組長が池元組長の命令に逆らえないのは仕方ないが、ただ言われるとおりやっていたらその功績を認めてもらえるものではないことくらいわからないの? 次々と汚い仕事をこなしてきた挙句、「破門」を告げられた大友組長が池元組長に対して怒りを爆発させる姿をみていると、その頭の悪さに辟易する。

豊臣秀吉は織田信長の言うとおり忠実に行動していたが、それは信長特有の癪癪玉の持っているいき方を十分計算してのこと。他方、明智光秀が本能寺の信長を襲ったのは、考え抜いた末このままでは織田軍団内での自己の生き残りは無理と判断したため。したがって、

結果的に明智光秀は滅んでしまったが、自分のこの選択には後悔していないはずだ。ところが本作における各組長たちの行動をみていると、何の戦略・戦術もないことがよくわかる。やっぱりヤクザにも複雑な競争を生きていくためには、武闘だけではなく知識と知恵が必要。そう思っていると、やっぱりそんな奴がいたいた、本作にも。さて、血で血を洗うヤクザ抗争が展開していく中、死んでいくのは誰？そして、生き残るのは誰？

2010（平成22）年4月21日記

## たけし、カン又惨敗！

1) 今年5月12日～23日フランス南部のカンヌで開催された第63回カンヌ国際映画祭のパルムドール賞（最高賞）は、タイ人監督の『ブンミおじさん』が選ばれた。5月25日付朝日新聞は「主要賞がアジア、アフリカ、欧州、北米の各大陸に配分されるバランスをとった結果となった」と同映画祭を総括したが、その見出しは「『声高』より『静けさ』輝く」。つまり、「今年は物議を醸す作品が少なく、落ち着いた語り口が目についたが、賞の行き先も静かな映画に落ち着いたようだ」という分析だ。

2) そうなると、逆に受け入れられなかったのが北野武監督の『アウトレイジ』。ビートたけしをはじめとするヤクザたちのガラの悪い怒鳴り合いと残酷な殺し合いが売り(?)の『アウトレイジ』は、お呼びでなかったわけだ。監督自身もはじめから、「コンペに選ばれただけで名誉。それ以上望むのはずうずうしい」「今回はよくぞ選んでくれました、だよ。キアロスタミの映画とオレの暴力映画が一緒に上映されるなんて、ちょっと笑っちゃうよね」と語っていたらしい。つまり、「今回の無冠は想定内だっ

た」わけだ。たしかに、娯楽作としてはよくまとまっているが、いい年をしたヤクザたちの頭の悪さには私もウンザリ。3) 「世界のキタノ」に対して真正面からケチをつけるのは難しいかもしれないが、地元紙は「なぜコンペティションに選ばれたのか理解できない」（フィガロ）、「監督の作品では最低」（リベラシオン）、「過剰な暴力描写はグロテスク」（ルモンド）とボロクソ。さすが、世界一言論が自由で評価の厳しい国フランスだと感心。

4) どういう基準でコンペ参加作が決まるのかは知らないが、もともと受賞可能性の薄い作品を出品しながら、期待だけ煽るのは日本のマスコミの悪い癖。世界のキタノという名前だけで通用するほど現実には甘くない。そう考えるとやはり、04年の第57回ベルリン国際映画祭で柳楽優弥が男優賞を受賞した是枝裕和監督の『誰も知らない』や、今年の第60回ベルリン映画祭で最優秀女優賞を受賞した寺島しのぶ主演、若松孝二監督の『キャタピラー』のような、入賞を狙える秀作を出品させなければ。

2010（平成22）年6月1日記